



【主な内容】

///会長あいさつ///

///知事メッセージ///

///創刊によせて///

真冬のブナ林

///特集///

ふくいの水

///環境保全団体///

美しい、潤いのある川をめざして

///企業///

● 会長あいさつ

すぐれたふくいの環境を次の世代に

会長 市橋 保

情報紙「みんなのかんきょう」の創刊にあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

私たちのふるさと福井は、郷土の人々が長い年月にわたって守り、育ててきた美しい緑や、清らかな水など豊かな自然に恵まれています。

本県のすぐれた環境を保全し、次の世代にすばらしい環境を引き継いでいくため、私たち一人ひとりが現在の経済活動や生活の在り方を見直し、どのよう

に行動すべきかを考え、出来ることから実践に移していくことが強く求められています。

こうしたことから、それぞれの立場に応じた行動を起こすことが、現在に生きる私たちに課せられた大きな責務であり使命であると深く認識し、昨年10月に自発的な活動を行うための推進母体として、環境ふくい推進協議会を設立いたしました。

この協議会の活動を通じて、環境に関する講演会の開催や情報の提供、環境保全団体に対する育成・支援等を行い、地域に根ざした実践活動の推進に

取り組んでまいりたいと考えております。

そして、これらの活動内容を多くの人に知っていただくため、また環境に関する各種の情報が提供できるよう、ここに情報紙「みんなのかんきょう」を創刊しました。

この情報紙を通して、環境問題を深く認識いただければ幸いに存じます。今後とも県民の皆様環境保全運動の輪を広げていくために、一層の御支援、御協力を心からお願い申し上げます。

● 知事メッセージ

環境保全活動のさらなる広がりを

福井県知事 栗田 幸雄

21世紀まであと数年となった今日、都市・生活型公害や地球規模の環境問題に取り組み、豊かで美しい環境を保全していくことが重要な課題となっております。

県といたしましても、「豊かでうるおいのあるふるさとをめざして」を県政テーマに掲げ、人と自然にやさしい環境づくりを進めるための諸施策を展開しており、現在、多様な環境問題に適切に対応するため、環境行政の規範となる条例の制定に向けて作業を進めているところであります。

また、県下一斉に環境美化活動を行う「クリーンアップふくい大作戦」や「環境アドバイザー制度」の発足など、積極的な取り組みを行っております。しかし、環境問題の解決にあたっては、環境保全のためのボランティア団体や、県民、事業者、行政が一体となって、取組を進めていくことが重要であります。

そうした意味におきまして、貴協議会が設立され、地域に根ざした実践活動や普及活動に取り組まれますことは、誠に意義深いものがあります。

貴協議会の設立を契機として、県民の環境問題に対する関心が一層高まり、21世紀に向けて環境保全活動がさらに大きく広がることを御期待申し上げます。

● 創刊によせて

真冬のブナ林

山岳エッセイスト 増永迪男



春夏秋冬の季節に何度か眺めている夜叉ヶ池は、真冬になるとどのような様子になるのだろうか。

雪に埋もれているはずの山上の広い池の景色がふと心をよぎり、1月に新雪を分けて登った。岐阜県との境の山脈上の池まで、真冬に登るひとはそうないから、もちろんだ道はなく、日野川沿いの集落広野のはずれから、かんじきで新雪を踏んで行った。

谷合いでは、ちらちらと雪の舞う朝だったが、5時間あまりかけて登りきると、夜叉ヶ池の周辺はごうごうとうなりをあげる吹雪の世界だった。広い池は新雪の平原に変わっている。その上を風に乗った雪の集団が、白い波頭のように何列にもなって渡って行く。池の北側は、吹雪のあいだで見え隠れする霧氷に覆われたブナ林だった。

氷の針となって吹き寄せる風をこらえて、身体をひねるようになって立ち、林を見つめているうちに、おや、と浮かんてくるものがある。夜叉ヶ池では、ブナキも身体を曲げて冬の風に耐えているのだった。

改めてブナ林全体に目をやると、標高1000メートルを越えるこの辺りでは、林は季節風に刈り揃えられた美

しい連なりを見せて、ブナノキが生きてゆくりぎりの限界を示していた。

今から1万年くらい昔、人間がまだ登場しない前の、福井県の山や野を想像してみることがある。おそらく、現在と比べてほとんど違うところのない山は、深い森に包まれ、野は複雑な水路と、沼や池の間に入り混じる大小の林に覆われていたことだろう。その中では、さまざまな生き物の姿が見られ、ただ人影だけが見えないのだ。

以来、私たちは環境に手を加え、食糧生産の用地を作り広げ、現在の姿に至った。英語でいう環境を変えるということばは、耕作を意味することになり、文化を指すことばの源にもなった。環境を人間に都合よく変えていくことこそ文化である、という認識は現在も通用する。

戦時中だった私の少年時代を考えると、あのころの地球の広がりには、無限のものが感じられた。大陸の果てには、未知の世界が存在するとも思われて

いた。
それから五十年、私たちの知識のなかで、地球の面積はみるみる小さくなった。今では、環境と文化についてのこれまでの認識を、厳しく見つめ直す必要もあるのだろう。

四季福井の山を歩いてきて、人の手を感じさせない森と出会うことは、心が誘いこまれる喜びだった。写真の木々は、まだうら若いブナにも見えるけれど、実際はつらい条件の中で、おそらく百年以上の年月を体験しているに違いない。環境を見つめ直すということは、こうした木々と共感し合うこと、とも考えている。

(写真 夜叉ヶ池ブナ林 1月/筆者撮影)

●特集 ふくいの『水』

ふくいの河川、湖沼、海は、潤いのある環境空間をかもしだしている。
しかし、昔を考えると、各所で泳いだり、ホテルがとれたものだろう。
そこで、現在のふくいにおける『水』を考えてみよう。



◆かけがえのない命の源『水』

昨年ほど『水』について、関心が高まったことはない。
昨年の夏は、日本各地で水不足に陥り、断水や工場の操業停止に追い込まれるなど 様々な問題が起こり、現在でも一部の人は水不足が続き、不自由な生活を送っている。
このようなことから、人間生活において、『水』が大切なものであることを認識し、清らかな『水』を守っていかねばならない。
そこで、今回は『水』の環境問題についてレポートする。

◆生活排水の流入に悩む『河川』

福井県を代表する九頭竜川をはじめ、県内には大小あわせて260河川があり、それらの総延長距離は1470kmにおよんでいる。県では、このうち主な34の河川の56地点について、水質の監視、測定を行っているが、いずれの川についても、カドミウムや鉛 など人の健康に影響を与える有害物質による汚染は認められていない。

しかしながら、生活排水や工場排水などに含まれる有機物による汚濁の指標であるBODについてみると、都市周辺や市街地を流れる中小の河川にかなりの汚濁がみられており、汚れた川底を繁殖の場所とするユスリカの異常発生や景観の悪化をまねくようになっている。

中小河川は一般に水量が少なく、汚濁が進みやすい条件下にあるが、流域で行われる宅地開発に下水道の整備が追いつかず、生活排水が無処理で川に流されていることが汚濁の原因のひとつとなっている。

福井市の狐川、敦賀市の二夜の川などでは、大量のユスリカによって洗濯ものが汚れるなどの被害が発生したことをきっかけとして、地域ぐるみでの河川浄化運動が展開されるようになり、成果を上げている。

また、最近では、川や海、湖など水のある環境を水質汚濁という視点だけでなく、水量や水生生物、水とのふれあい(親水性)など多様な視点でとらえようとする動きが高まってきており、一乗谷川などでは、魚やホテルが生息しやすいように、また、周囲の景観と調和するように、自然石を用いた護岸が造られるようになってきている。



◆『湖沼』に忍びよる汚濁の影

本県には、北潟湖、三方五湖、刈込池、武周ヶ池、夜叉ヶ池などの天然の湖沼のほか、九頭竜湖などの5つのダム湖がある。

このうち、北潟湖、三方五湖の両湖では、窒素やリンの流入により植物プランクトンが増殖するいわゆる富栄養化の進行により、水質が悪化している。とくに、三方五湖のうち三方湖では、近年、水温が20℃以上になる6～9月を中心に広範囲にわたってアオコの発生が見られるようになり、観光資源である湖の景観にも影響を及ぼすようになっている。

北潟湖や三方湖は水深が3m前後と非常に浅く、光が湖内に透りやすいため、植物の光合成を促進し、その結果、植物プランクトンの増殖が生じやすくなっている。

現在、これらの湖の周辺の自治体では、生活排水対策指導員を委嘱し、てんぷら油や調理くずを台所から直接流さない、洗剤を正しく使うなど生活排水対策の普及がはかられている。また、「三方五湖浄化推進協議会」などの団体においては廃食油を回収し、引き取り先の業者が作った粉石鹸を使用するなどの自主的な活動が展開されている。

また、両湖周辺では、下水道整備などの生活排水対策や流出しにくい肥料への転換、側条施肥田植え機の普及などの農業排水対策が進められているが、さらに、湖を直接浄化するため、平成4年からは、湖底のヘドロの浚渫や窒素、リンを吸収する水生植物の植栽も始められるなど総合的な対策が推進されている。

◆すべてを呑みこむ『海』

本県の海岸線の総延長距離は約420kmであり、そのほとんどが若狭湾国定公園、越前加賀海岸国定公園に指定されている。

県では、海域の34地点で水質の監視を行っているが、有害物質や海域における有機性汚濁の指標であるCODのいずれについても汚染は認められていない。

このように水質という尺度で見ると、良好な環境を保っている海であるが、一方で発砲スチロールやビニールなどの腐らないプラスチックごみが、海岸線に漂着したり海底に堆積するなどして海を汚染し続けている。

こうしたプラスチックごみは、海辺の景観の悪化にとどまらず、今日では漁業にも大きな影響をもたらすようになっている。とくに、サヨリなどを獲る船曳き網漁やエビやカレイを獲る底曳き網漁では、魚に混じって多くのプラスチックが網にかかるなど、操業に大きな支障が生じている。さらに、アワビ、サザエ、ウニの磯根漁場でも海底に堆積するごみによってその生息環境が急速に悪化している。

このため、平成4年から福井県漁業協同組合連合会を中心とした漁業関係者が「海をきれいにする実行委員会」を組織し、活動を行っている。毎年6月の環境月間の第一日曜日には県下一斉に約6000人が参加して、海岸に打ち上げられたごみや、海面に浮遊するごみの回収を行っているが、同委員会では「何よりも、みだりに川や海にごみを捨てないでほしい」と強く訴えている。



Q&A

Q BOD(生物化学的酸素要求量)とは？

A 水中の有機物が微生物の働きによって分解される時に消費される酸素量で、河川の有機汚濁を測る代表的な指標である。BODが大きいほど、河川の汚濁が進んでいるといえる。

Q COD(化学的酸素要求量)とは？

A 水中の有機物を酸化剤で化学的に分解した際に消費される酸素量で、湖沼、海域の有機汚濁を測る代表的な指標である。CODが大きいほど、湖沼、海域の汚濁が進んでいるといえる。

Q アオコはなぜ発生するか？

A 窒素やリンは、植物成長の重要な栄養素である。このため、窒素やリンを多く含む生活排水や肥料などが湖に流入し、その濃度が高くなると植物プランクトンが異常繁殖し、アオコが発生する。緑色の粉を水面に散らしたように浮遊することから別名「水の華」ともいう。アオコが腐敗すると大量の酸素を消費するため、魚介類等の生息を妨げ、悪臭を発生するなどの被害を引き起こす。

二夜の川を美しくする会

二夜の川を美しくする会では、二夜の川の浄化運動に取り組まれ、かつてのような 憩いの場になるように現在も努力されています。そこで、会員の皆さんにもお話を伺いました。



二夜の川の会のパンフレット

◆どのような動機で浄化運動に取り組むようになったのですか

「かつての二夜の川は、気比の松原に流れるきれいな小川で、戦後、住宅や大工場 が建ち並ぶようになると、生活排水や工場排水が大量に流入し、川の汚染が進み、それにつれて、川にごみを捨てる人が絶えなくなりました。昭和55年頃には、川 辺には、空をまっ黒に覆うようにユスリカが大量に発生しました。そこで、昭和60年 に地域の6人の区長さんが中心になって、かつての姿を取り戻すため魚類の放流や清 掃などを行い、川を美しくすることを目的に当会を設立しました。」

◆どのような活動を行っていますか

「まず、ユスリカの天敵である色鯉の稚魚を多数放流しました。その結果、現在ではユスリカの発生もなく、鯉の数も2万匹余になり、観光バスも川辺に車を停めて見るような新名所になりました。また、河川の清掃やパトロールを行ったり、河川美化の看板設置、岸辺にさつきの花を植えて環境美化に努めています。」

◆最後に、今後の活動についてお聞かせください。

「今後とも鯉を放流し、川辺の環境整備に全力を挙げ、将来的に二夜の川を敦賀市 民の憩いの場にしたいと、会長以下全員が張り切っております。」

二夜の川を美しくする会

昭和60年9月設立。会員800名。鯉の放流などをはじめ、二夜の川の浄化運動を実施。その取組により、平成5年度地域環境美化功績者として、環境庁長官表彰をはじめ様々な賞を受賞。

●企業

川にやさしい排水浄化 セーレン(株)鯖江工場

本県は、繊維王国として染色工場がたくさんありますが、これらの事業者は染色排 水をどのように処理しているのでしょうか。そこで、セーレン(株)鯖江工場で行っている排水の処理方法について、公害防止 の担当者の北嶋係長さんにお話を伺いました。

◆ 染色排水の処理方法としてどのような処理方法を導入しているのですか

「鯖江工場では、ポリエステルやシルクの染色を行っています。その工程からは、染料が含まれた着色排水がでてまいります。染色排水の処理は、微生物の働きによる 活性汚泥処理が一般的ですが、私どもの工場では、できるだけ川へ放流する排水の色 を落すことをねらって、昭和53年に鯖江工場を建設する際に、活性汚泥処理に加えて オゾン酸化による処理も併せて行うこととしたものです。」

◆ このオゾン酸化処理とはどんな処理方法ですか

「オゾンとは、酸素が3つ結合した分子で物質を酸化する働き(酸化作用)があります。オゾン酸化処理は、オゾンの酸化作用で着色物質の化学構造を分解し脱色するものです。」

◆ 処理の効果はどうですか

「処理前の排水のBODは約120mg/lで処理後は約10mg/l程度となっています。また、色の程度ですが、分解しにくい染料もありますので、十分とはいえませんがオゾンによる処理をすることによって、脱色効果がみられています。」

◆ その他、工場で取り組んでいることはどのようなものがありますか

「セーレン(株)では、環境対策委員会を設置して公害防止対策を中心に全社的に 環境問題に取り組んでいます。具体的には、公害防止の徹底のほか、節水、温排水による省エネの推進、再生紙の使用や廃棄物削減対策等にも取り組んでいます。今後も、クリーンエネルギーへの転換を進めるなど、環境保全に向けて努めていきたいと考えて います。」

次の世に豊かな環境を 環境ふくい推進協議会設立！

「環境ふくい推進協議会」の設立総会は、平成6年10月14日、織協ビルの大ホール で開催された。

総会には、発起人代表の市橋保県経済団体連合会会長をはじめ、13名の設立発起人 が出席したほか約400人が参加した。

市橋代表が、『本県は豊かな自然に恵まれているが、生活排水による河川の水質汚 濁をはじめ、廃棄物の増加など身近な日常生活を原因とする環境問題が起こっている。また、地球規模の環境問題については、今や誰も避けて通ることのできない重要な問 題になっている。このような中、本県のすぐれた、すばらしい環境を次の世に引き 継ぐため、県民、団体、企業が各々の立場で身近なことから環境保全活動に努めてい かななくてはならない。』とあいさつを行った。

来賓の栗田幸雄知事、池田熊蔵県議会議長の祝辞、伴岩男発起人より協議会設立ま での経過について報告があり、続いて、荒川を守る会会長中西猛氏を議長に選出し、議事に入った。

議事では、協議会規約を決定した後、ついで役員選出が行われ、会長に市橋保氏、副会長に村上哲雄、政野澄子の両氏を選出したほか、役員が選出された。さらに、初 年度の事業として、環境問題に関する情報、企業、ボランティア団体などが行う環境 保全活動を紹介する機関紙を定期的に発行すること、協議会の設立趣旨や事業内容を 県民に知らせ、組織拡充をはかるためのパンフレットを作成することなどが決められた。

また、総会に引き続き、設立記念行事として『笑ってよ、北極点』との演題で、和 泉雅子氏が北極点到達の貴重な体験を交えて、自然の厳しさ、大切さを訴える講演を行った。

発足時の会員数は、個人1047人、活動団体54団体、企業154社であり、県と市町村 は支援という形で参加している。

また、協議会の事務局は、県環境保全課内に置かれている。

役員名簿

会 長

市橋 保(福井県経済団体連合会会長)

副会長

村上 哲雄(二夜の川を美しくする会会長)

山内フミ子(福井連合婦人会会長)

企画委員

武内 盛直 御嶽 義視 榎本 格夫 ◎伴 岩男 五十嵐賢二 塩津 滯

久島 雅夫 向当みつ子 清水 正勝 正本 正廣 青木 慶之 毛利 保秀

熊野 省治 宮形栄喜知 白嶋 清 大角 正信 増永 豊 山本 黎明

留田 伸一 堀 宏明 徳丸 俊夫 上坂 重之 若新 進 青山 修一

田中 恵子 稲津 悦朗 (◎は、企画委員会委員長)

監 事

松本 齋 成田 基悦